

# ガラツ八祝言

野村胡堂

—

ガラツ八の八五郎が、その晩むこいり聳入をすることになりました。

祝言の相手は金沢町の酒屋で、この辺では有福の聞えのある多賀屋勘兵衛。

嫁はその一粒種で、浮気っぽいが、綺麗さでは評判の高いお福という十九の娘、

——これが本当の祝言だと、ガラツ八は十手捕縄を返上して、大店おおだなの聳養子に

納まるところですが、残念ざんねんながらそんなうまいわけには行きません。

実際のところは、その晩聳入りの行列などを組んで歩いたら、命を奪られる

かも知れないという、——にせもの真実の聳、仲屋せがれきんの伴錦太郎たろうに頼まれて、いやいやな

がらガラツ八は、聳入の贖物にせものになることを引受けさせられてしまったのです。

この頼みが持込まれたとき、さすが暢気者のガラツ八も、再三辞退しました。

が、錦太郎の頼みがいかにも真剣で、涙を流さぬばかりに拝むのと、親分の銭形平次が、多賀屋の身上しんしょう、主人勘兵衛の評判から、娘お福の行状、それから聳の仲屋の暮し向きから、錦太郎の人柄まで調べ抜き、『なるほどこれは、うっかり祝言をさせられない』ということが解り、自分からもガラツ八を説いて、『いざ三々九度の杯という時、真物の聳ほんものの錦太郎と入れ替わらせるから』という条件で、ようやく聳入の偽首にせくびになることを承知させたのでした。

祝言は多賀屋の身代にしては出来るだけつつましやかに、当日の客は余儀よぎない親類を五六人だけ、聳入りもほんの型ばかりということにして、偽首の八五郎が、仲人宝屋祐左衛門夫婦に護られ、駕籠の垂たれを深々とおろして、多賀屋へ乗込んで行ったのは、秋の宵——酉刻半むっはんそこそこという早い時刻でした。

途中は平次の子分や、ガラツ八の友達が多勢で見護り、行列はまず何の障さわり

もなく多賀屋の門口を入りました。紋切型の挨拶を上の空に聞いて、奥へ通されると親分の平次が、恐ろしく真面目腐めった顔をして迎えてくれます。

「どうだい八、満更まんざら悪い心持じゃあるめえ」

最初の平次の言葉はこんな調子でした。

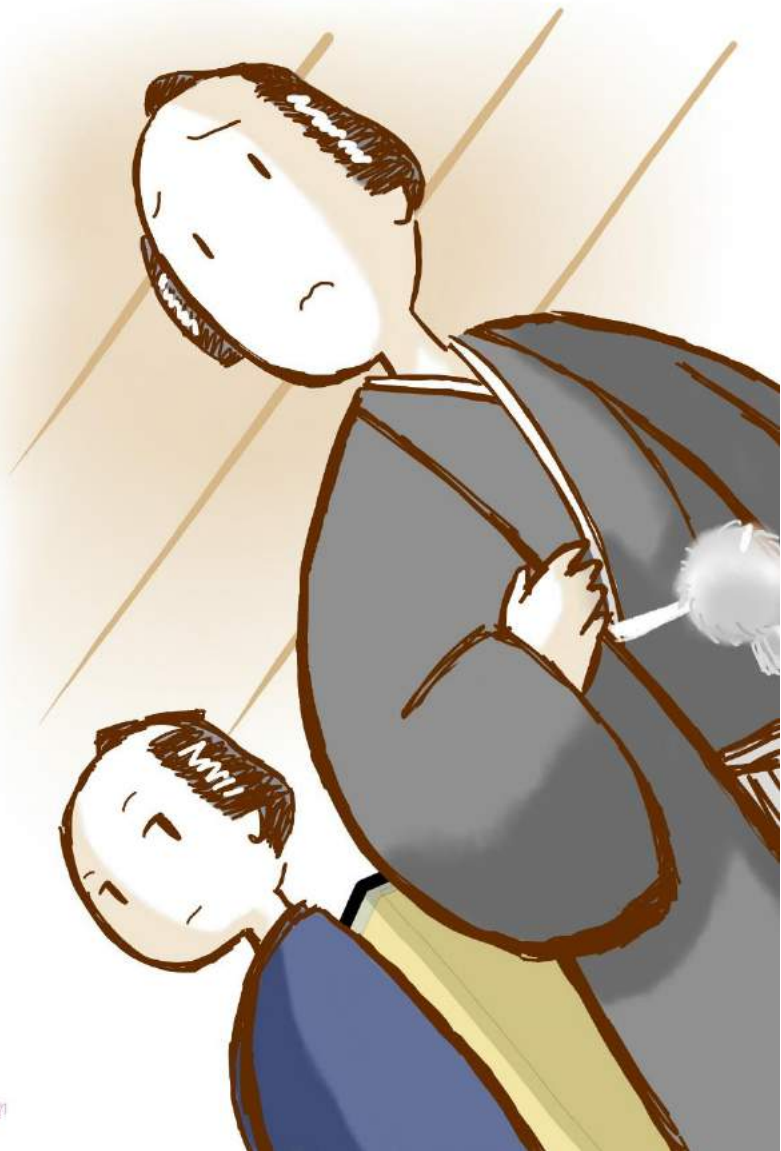
「変な心持ですよ、親分」

「あやかりものだよ、——化ばけ序ついでにもう少しその儘ままにしていってくれ。真物の聳そは陽が暮れるとすぐここに来ているが、肝心かんじんの嫁よめの支度しやくが出来ない。三々九度さんさんくはいずれ一刻も後のことだろう、その時はお客様で鱈腹たらふく呑むが宜い」

「呑んだってつまらねえ」

「ひどく落胆がっかりするじゃないか、——だがな八。聳そにもよりけりだが命ねらを狙ねらわれる聳そなんてものは、あまり有難くないぜ」

「有難くなくたって、偽首よりは器量きりょうが良いじゃありませんか」



「まア、そう言うな」

ガラツ八の不満は、平次も察しないではありませんが、こうするより外に術てのない切羽詰せっぱった情勢だったのです。

「親分は、いろいろの事を調べたんでしよう」

「まア、調べたつもりだ」

「誰がいったい聾を殺そうなんて気持になって居るんで——」

聾の錦太郎が青くなって平次のところへ飛込んだのは知っていますが、深い事情はガラツ八もよくは知らなかったものでしょう。

「金沢町の若い男は皆んなだよ」

「へエー」

「大きな声じゃ言えねえが、よくもあんなに若い男と懇意こんいになったと思うくらいだ」

「へエー達者な娘だね」

「祝言の晩錦太郎を打ち殺そうと言い出したのは三人ある」

「へエー」

「中でも氣違いじみているのは、やくざの信三郎と髪結いの浪蔵さ、——聾の錦太郎奴<sup>め</sup>、歩いて来るなら刀で向うが、駕籠で来るなら何処<sup>どこ</sup>かに待ち伏せしていて、土手つ腹へ槍<sup>やり</sup>をブチ込んでやる——つて、言つて居たそうだ」

「危ねえな、親分」

ガラツ八も少しばかり薄寒い心持になります。

「尤<sup>もつと</sup>も、お前<sup>めえ</sup>には其処<sup>そこ</sup>までは聴かせなかつたよ、土壇場<sup>どたんば</sup>になつて、聾の身代りになるのが嫌だなんて言い出されると困るからな」

「呆<sup>あき</sup>れ返るぜ」

何<sup>ど</sup>んな仔細<sup>しさい</sup>があるか解りませんが、杯事<sup>さかずきごと</sup>の始まる前、聾の支度部屋を占領し

て、平次はガラツ八相手にこんな無駄を言っているのです。

「大丈夫だったのかい、八。よく脇腹のあたりを見るが宜い、槍の棘とげなんか残っている、後でとがめるよ」

「冗談じゃない、槍の棘なんか立てられてたまるものですか、——本当にそんな危ない聾入だったんですかい、親分」

ガラツ八も、済んだことながら、今さら怖おぞけ気をふるいました。

「大丈夫だよ、吠える犬は噛み付かない」

「へエ——」

「その上、途中は二十人もの眼で見張らせたんだ。信三郎や浪蔵は指も差せるこつちやない」

「驚いたね、どうも。そんな話を聴くと脇腹がムズムズしますよ」

「三々九度の杯さかずきさえ済んでしまえば此方こちのものだ。人の女房になってしまった

お福のために、人殺しの罪を背負つて、お処刑台しおきだいに載つかるのはどう考えたつて知恵が無さ過ぎるよ、今晚一と晩だけ越せば天下泰平さ」

「そんな思いまでして、あの錦太郎とか言う野郎は祝言をしたいのかね、男の切れっ端ぼしのくせに」

八五郎が少しく義憤ぎふんを感じたのも無理のないことでした。仲屋の錦太郎というのは、身上しんしょうこそ軽いが、なかなかの好い男で、金持の一人娘で、神田で指折りの綺麗首であるにしても、評判の蓮葉娘はすつばむすめの聳おには惜おしいほどの若者だったのです。

「多賀屋は神田で幾軒ぶげんという分限だ、その上お福はあの通り美しい。大概たいがいのことなら無理をしたくなるだろうよ。それに、多賀屋の主人勘兵衛と、仲屋の先代は無二の仲で、やりましよう、是非貫おうと約束し、藁わらのうちから証文を入れたり証人を立てたりしたほどの許嫁いいなづけなんだとよ」



「不自由なことだね」

「町人はそれが何よりのほまれさ、約束を守るといふのは決して悪いことじゃない」

「本人の気持などを其方そっちのけにね」

「たいそう今晚は機嫌が悪いようだな、八」

「金沢町小町のお預けなんぞ喰わされると、たいがい機嫌も悪くなりますよ」  
ガラツ八は全く以ての外の機嫌でした。

「ところで、杯事の支度はまだかな」

「親分はそんなにしていねて構いませんか」

「構わないとも、狙ねらわれてるのは聳ねだろう。その聳ねがここに居るんだもの、平次がこう附ついているほど確かなことはないじゃないか」

「全くね」

ガラツ八の八五郎は、照れ臭く袴はかまの皺しわばかり気にしております。どうもしびれが切れて叶かなわない恰好かっこうです。

「尤も、真物の聲もつとでなくて、お前は本当に仕合せだったかも知れないよ」

平次は話頭を転じました。

「へエ——？」

「あんな評判はすっぱむすめの蓮葉娘のお守をして、一生踏ふみ付けられて暮すのは、楽な仕事じゃないぜ」

平次の声は小さくなりました。

「へエ」

「その上仲屋は十年も前に身代限りをして、近頃はその日の物にも困っているんだ。錦太郎はどんなに歯ぎしりしても、多賀屋へ聲にでも入らなきや身の立てようはない」

「親と親との昔々の約束は、お福を仲屋が貰つて、錦太郎の嫁にする筈だったとよ、それが、仲屋の主人が死んで、身代が滅茶滅茶めっちゃめっちゃになつて仕舞しまうと、一人娘を嫁にくれとは言いにくからう」

「なる程ね」

「尤もつとも錦太郎は腹の中じゃ面白くないかも知れないよ、——それに、聴こえるかい、八」

「へエ」

「錦太郎には他に言い交かわした女があるんだつてね」

「太てえ野郎だね」

「でも、背に腹は代えられなかつたのだから」

「俺なら背と腹を代えるがな」



「灯だ、灯だ」  
あかり

平次の声が響くと、さすがに気の付いたガラッ八は、行燈あんどんを提げて飛込んで来ました。

「嫁がやられたッ」

灯あかりの中に崩折れた花嫁姿、緋縮緬ひぢりめんが血のように燃えて、それは凄まじくも華やかに浮いたのです。

「入っちゃならねえ、入った奴には皆んな下手人の疑いがかかるぞ。八、そこで頑張がんばって、一々出入りの顔を調べろ」

平次の声が響くと、廊下まで殺到した群集が、雪崩なだれを打って引返します。

「私は構わないでしょう、親分」

その跡に取り残されて、おろおろしているのは真物ほんものの聳、仲屋の錦太郎でした。二十五六の華奢きゃしゃな男、青い顔をして、激動に顫えておりますが、性根はな

かなかの確りものらしくもあります。

「いや、こいつは髻殿に見せる幕じゃねえ。親御の勘兵衛さんだけ入って下さい——それから町内の外科を大急ぎで頼むんだ、深傷だが、命は——」

平次は手負を抱き起してフツと口を緘つぶみました。

「親分さん」

この時、ようやく主人の勘兵衛が飛んで来たのです。

「大変なことになったぜ、御主人」

「どうしましょう、親分」

六十男の勘兵衛は、娘の後ろから恐る恐る差しのぞきます。それでも、自分の身体で庇かばって、多勢の目から手負の姿を見せないようにしながら——。

「八、何をぼんやりしているんだ。曲者は外へは出られない筈だ、出口出口は先刻の俺の声一つで、二十人の下っ引が固めている。手前は錦太郎を見張って

いるが宜い。自棄やけになつた曲者は何をやり出すか解らない」

平次の命令は周到を極めます。

そのうちに外科が来て、花嫁の傷をしらべました。傷は深くはないが、急所をやられたので、朝までの命がむずかしかりうと言ふ噂が、誰からともなくパツと家中に伝わります。

手負を外科と主人に任せまかせた平次は、花嫁の支度部屋から出発して、縁側へ、庭へと調べて行きました。この道以外は人目の関が幾重にもあつた筈ですから、どんな忍びの名人でも、人に見とがめられずには通れなかつた筈です。

たった一つの手燭てしよくで、平次は実によく調べて行きます。生湿りなましめの庭には誂あつらえたように足跡があつて、それがかなり大きいことや、突当りの木戸は外から簡単に輪鍵わかぎの外せることを見極め、

「いるか」

静かに声をかけると、

「親分」

木戸の外から応こたえた者があります。言うまでもなく下つ引の一人。

「誰も出た者はないな」

「ありませんよ、親分」

「誰でも構わない、外へ飛出そうとする者があつたら、遠慮無しに縛り上げてくれ」

「へエ——」

「御苦労だな」

平次は言い捨てて元の縁側に帰りました。

「おや？」

見ると、そこにも泥の足跡が——よく拭き込んだ縁の板を薄く染めているで



はありませんか。足跡を追って行くと、真つすぐに花嫁の部屋に入って行きま  
す。

念のためにツイ傍そばの上便所の扉をあけると、二本燈心の薄明りで、——草履ぞうり  
が一足。手に取り上げて裏返すと、生湿りなましめの苔臭こけくさい土が一面に附いているでは  
ありませんか。

「親分」

不意にガラッ八が顔を出しました。

「何だ、八？」

「刃物を見付けました」

手拭に包んで来たのは、あいくち 匕首ひとふりが一口、切先が血に染んで、少し刃こぼれがあ  
ります。

「何処にあったんだ」

「あつしが居た部屋の花瓶かびんの中ですよ」

「誰が見付けたんだ」

「錦太郎が気が付いたんで——」

「馬鹿ッ、——その錦太郎を見張つて居ろと言つたじゃないか」

平次の声は急に激しくなりました。

「だって、親分」

「何がだつてだ、——刃物なんざ、何処にあつたつて構うものか、錦太郎に間違いがあつたらどうするつもりだ」

「へエ——」

ガラツ八は不平らしく引返しました。しばらくその後ろ姿を見送っていた平次、何を思い付いたか、猛然として後を追います。が、それも及びませんでした。ガラツ八がちよつと眼を離した間に、事件は思いも寄らぬ方へ急展開をし

たのです。

「あッ、やられたッ」

ガラツ八の声があつ走ります。

「やったな、畜生ッ」

飛込む平次。先刻まで平次とガラツ八がいた部屋に、錦太郎は半顔血に塗<sup>まみ</sup>れて、氣を喪<sup>うしな</sup>つていたのです。

「どうした」

「氣をしつかり持て」

平次はそれを後ろから抱えて、あり合せのぬるくなった茶を吞ませました。

「あ、有難うございます、もう大丈夫です」

錦太郎は極り悪そうに居住<sup>いずまい</sup>を直します。

「どうしたというのだ」

「何処からともなく、こいつが飛んで来ましたよ。頬に当たったことまでは知っています——面目次第もございません。私は気が弱いんで」

錦太郎は恥かしそうに首を垂れます。切られたのは左の頬先、ほんの引つ掻きほどですが、潮時と見えて、血が顔半分を染めております。——尤も錦太郎が夢中で傷を押えた手で汚よじしたせいかも知れません。

刃物はガラツ八が差して来た、犬おどかしのような脇差わきざし。こいつは聳入わきざしの恰好にはなくてはならぬ道具ですが、先刻さつきここへ抛ほうり出して、嫁の部屋へ駆付けたのを、曲者はさっそく利用して、縁側から抛ほうつたのでしよう。

「曲者の顔を見なかつたのかい」  
傷を見ながら平次は訊ねました。

「後ろから抛ほうられたんで、何んにも見ません」

「そいつは災難もつとだったね。尤も、大難が小難で済んだようなものだ。幸い、町

内の外科が来て居るから、手当して貰うがよかろう」

「有難うございます」

「ところで、曲者はいよいよ家の中に居るに決ったぞ。床を剥はぎ、天井へ潜もぐり込んで捜し出そう、八」

「おーい」

「何処どこにいるんだ」

「押入の中ですよ」

八五郎の返事は陰いんに籠こもりました。

「その意気だ、しっかり捜せ、——外から二三人呼び入れて手伝わせても宜い」

三

疑いは三人にかかりました。

多賀屋の外を、ウロウロして居た、やくざの信三郎と、髪結の浪蔵と、——これはお福の甘い言葉に取り逆上<sup>のほ</sup>せて、是が非でも祝言を妨<sup>さまた</sup>げようという仲間——。

あとの一人は、多賀屋の番頭で品吉、三十そこそこの平凡<sup>へいぼん</sup>な男ですが、これもお福の笑顔に釣られて、多賀屋の養子になれるものと思ひ込んでいた男でした。

三人とも機会がありました。が、便所の草履<sup>ぞうり</sup>をはいて細工をしたり、匕首<sup>あいくち</sup>を聳<sup>か</sup>の部屋の花瓶<sup>かびん</sup>に入れるようなことは、品吉でなければ出来ない芸当です。

「この野郎ですよ、親分。思ひ切り引叩<sup>ひっぱた</sup>いて見ましようか」

聳<sup>か</sup>から岡<sup>ひきぬ</sup>つ引に引抜いたガラツ八は、品吉を縁側に引据<sup>い</sup>えて威猛<sup>いたけだか</sup>高になりま

「待て待て、もう少し考えてからにしよう。家にいる者が怪しいとなると、手代、下女、下男、それからお前も俺も、聾の錦太郎も怪しくなる、——こいつはそんな浅墓あさはかな企たくらみじゃあるめえ。その番頭は下っ引に見張らせておけ、——と  
ころで曲者は錦太郎を殺すつもりはなかったかも知れないが、——お福は確かに殺すつもりだった、——お福を殺していったい誰もが儲もうかるんだ」

「——」

平次が変なことを言い出すのを、ガラッ八は縁側から聴いておりました。

「お福が死んで、一番損をするのは誰だ」

「父親と聾の錦太郎じゃありませんか」

ガラッ八の応えは素直で簡明です。

「ところで今は何刻なんどきだろう」

平次はまた変な事を訊きます。

「亥刻半よっはんですよ、親分」

「あと半刻で明日か」

「――」

「明日は戌いぬで仏滅ぶつめつで、やぶるといふ日だ。祝言にはいちばん嫌われる」

「それが何うしたんで、親分」

「明日祝言がいけないとなると、今日のうちでなければなるまい」

「誰が祝言をするんで？ 親分」

「多賀屋の娘お福と、仲屋の伴錦太郎だ」

「えッ」

平次の言葉の意外さに、驚いたのは、隣の部屋で外科に手当をして貰っている錦太郎自身でした。

「お福ふかは深傷ふかだが、折角ここまで運んだ祝言、息のあるうちに盃事がしたいと



言うのだよ。しおらしい望みじゃないか。父親の勘兵衛は、涙ながらにその支度をしている。幸い聾の錦太郎は浅傷だ、子刻前に祝言の盃事をして、死んで行く娘を安心させようと言うのだ」

「――」

ガラッ八と錦太郎はゴクリと固唾を呑みました。事件のあまりに不思議な展開に、考えることも、異議を挟むことも出来なかつたのです。

「この上に妨げが入ってはいけない。浪蔵と信三郎と品吉は縛つてあるが、この上どこに寝刃を合せている者が無いとは限らない。善は急げだ、手当が済んだら行こうか」

平次はこう錦太郎と八五郎を促し立ててるのです。

#### 四

その夜の婚礼は、世にも不思議なものでした。

多賀屋の二階二た間を打ち抜き、善美をつくした調度の中に、眩まばゆいばかりの銀燭に照されて、凄まじくも早桶はやおけが一つ置いてあったのです。

金屏風きんびょうぶ、島台、世の常の目出度いづくめの背景の中に、それはまた、何と言う恐ろしい取り合せでしょう。

早桶の中に、仲人なこうど宝屋祐左衛門夫婦、多賀屋の主人勘兵衛、親類五六人、老番頭宅松が左右に居並びました。

一步、この席に入った錦太郎の顔色は、さすがにサツと変ったのも無理はありません。

「これは？」

ツイ唇をついて出た言葉、頬の色は半面をつつんだ繻ほうたい帯よりも白く見えます。

「娘はとうとう相果あいてました、曲者の手に掛かつて、たった十九で——」

多賀屋勘兵衛は絶句ぜっくしいしい、教わったせりふのように、こう言うのです。

「それで、私は、私は？」

「祝言の盃事をするのだ。あんなに焦こがれた仲だもの、せめて三々九度でも済すま  
さなきや浮うび切きれまい」

平次の声は妙に荒あつぽく響ひびきました。

「——」

寂じゃくとした一座、ともすれば、滅入めいるような緘黙かんもくが続つきそううでなりません。

「さア、早桶ふたの蓋ふたを払はつて、花嫁の最期さいごの姿と対面たいめんしてくれ」

平次は後ろからせき立てます。

「——」

思おもわず尻しりごみする錦太郎。

「解らねえ聾じゃないか、三々九度は偽首にせくびじゃ勤まらないよ」

ガラツ八は後ろから抱きすくめるように、早桶の傍の座に錦太郎を引据えま  
した。

「そんなに遠慮するなら蓋は俺が取ってやろう」

平次は早桶の側に寄ると、その蓋を取って、桶ごとパツと引っくり返しまし  
た。

「あッ」

中から現われたのは、お福の死骸と思いきや、——血の附いたあいくち匕首と、ガラツ  
八の脇差と、便所の草履ぞうりと、それから、最後に一つ、血に染んだ手拭てぬぐいが一と筋。

「錦太郎、これを知って居るだろう。手拭はお前の品に相違あるまい、花嫁を  
殺して間もなく押入で見つけた品だ」

「さア、のがれぬところだ、白状せい。聾入むこいりの晩、花嫁を自分の手で殺すとは何としたことだ、——言いのがれは無用だぞ。この家は宵から大勢で取囲んでいる、曲者は外から入る筈はない」

叱咤しったする平次、一座は思わず逃腰になって、この不思議なクライマックスを見詰めております。

錦太郎は唇を噛みました。が、しばらく自分の心持を落着けると、白々とした観念かんねんの顔を挙げ、キツと平次を睨み、それから主人勘兵衛の顔を見据えながら、少しかすれたが、落着き払った声でこう言うのです。

「白状するまでもあるまい、——殺したがどうした」

「錦太郎、それがお前の言う事か」

平次も思わずカツとなります。

「おう、三千両の身上を横取りされた上、江戸一番の蓮葉娘はすっぱむすめと添うくらいなら、

俺はどんな事でもする」

錦太郎の声は次第に疇かんが立って、引裂ひきさかれるような調子になります。

「宜い心掛けだ、——が、お前は誰を相手にして芝居を打っているか忘れたんだらう、——俺のところへ駆け込んで、聾の身代りを頼んだ時から、俺は臭くさいと睨にらんだよ。手を尽して調べ抜いて、万に一つの手ぬか抜りの無いところまで運んでおいたとは知るまい、——罨わなに陥おちたのはこの平次ではなくて、お前だった」

「それほど用心深い銭形平次が、お福の殺されるのを知らずに居たらう」  
錦太郎は勝利感に陶醉とうずいして亢然こうぜんとなりました。

「よしよし、その気でいるなら逢わせるものがある、——それ」

平次の手が動くとき、錦太郎の後ろの金屏風きんびょうぶが取払われました。その奥に置かれたように坐っているのは、何と、錦太郎が殺したと思ひ込んでいる、お福の健すこやかな姿ではありませんか。

「あッ、お前は、お前は」

おどろく錦太郎。

「おどろいたか錦太郎、智に身代りがあれば、嫁にも身代りがある事に気が付かなかつたらう。お前があいくちヒ首あいくちで突いたのは、忠義な下女のお常だ。振袖の下くさりかたびらへ鎖帷子くさりかたびらを着せておいたので、力ちからまか任せで刺さしたヒ首も、五分とは斬らなかつたよ」

「――」

錦太郎は何べんかお福に飛びかかりそうにしましたが、その都度つど、平次の眼に威圧されて、キリキリと齒を喰いしぼるばかりです。

「便所の草履をはいて、庭木戸を開け、曲者か外から入ったように見せかけたり、八五郎の脇差で、自分の頬を斬って、自分の身体に附いた血を胡麻化ごまかしたりしても、この平次の眼を騙だますことは出来ない」

「お前は——」

つづける平次の声を遮さへぎつて、錦太郎の怒りは爆発しました。

「止してくれ、俺はその豚ぶたの仔このような雌めすと祝言せず済んだだけでも沢山だ、  
——何でえ、岡っ引のくせに。何も彼かも見抜いたつもりでも、人の心みとおの見透し  
はつくまい」

## 五

「それがどうした」

静かに迎えた平次、このたけり狂う男に、もう少し事情を説明させる必要があつたのでしよう。



「何も彼も見抜いても、多賀屋勘兵衛の悪企みわるだくだけは見抜けなかったじゃないか」

「何？」

「言つてやろう、——その多賀屋勘兵衛は、今から十年前、死にかけている俺の父親を騙だまし、親切ごかしに、仲屋の身上を皆んな取上げてしまった大悪党だ」

「嘘だ」

勘兵衛は不意に怒鳴どなりました。よく光る頭から、ポツポツと湯気が立っております。

「——」

平次は黙つてそれを押えたまま、一方、錦太郎の言葉を続けさせました。

「俺が成人するまでという約束だった、——証人はうんとある、現にここになこうどいる仲人の宝屋もその証人の一人になって宜い筈だ。取上げた金は三千両、——」

この錦太郎が成人すれば返す筈なのが、二十歳はたちになつても二十五になつても返さない。お蔭で俺は仲屋の暖簾のれんと貧乏しよを背負しょつて、血の出るような苦勞をしながら育つた」

「父親の遺言状ゆいごんじょうは宝屋が預つてゐる。それには、お福とこの錦太郎を一緒にする約束が書いてある筈だ。万一、二人が一緒にならない時は、三千両の金は利息をつけて俺に返さなければならぬ。十年の利息をつけて、三千両の金を返すことは、今では多賀屋の身代を振つても出来ないことだ」

「お福を俺の嫁にしても、行く行くは仲屋のものは仲屋に返さなければなるまい。——悪知恵のたけた勘兵衛は、俺を躰たがひにして多賀屋の養子に直し、難癖なんくせをつけて追出すことを考えた、——売女根性ばいたこんじょうの——江戸一番の性悪娘を、この錦太

郎に押しつけ、嫌<sup>いや</sup>応<sup>おう</sup>言<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>せぬ祝言をさせようというのは、皆んなそのためだ。

俺は断つたとも。一応も二応も断つたが、——十年越しの借金を払って、母一人を安<sup>あん</sup>穩<sup>のん</sup>に養うためには、断つてばかりも居られなかった。——口<sup>く</sup>惜<sup>やく</sup>しいが俺

は承知した、言い交した女には因果<sup>いんが</sup>を含<sup>ふく</sup>め、——母にも観念して貰って——」

錦太郎は泣いておりました、苦<sup>く</sup>渋<sup>じゆう</sup>の色が顔一面の筋肉を痙<sup>けい</sup>攣<sup>れん</sup>させて、声のない嗚咽<sup>おえつ</sup>が、ときどき激情の言葉を吃<sup>ども</sup>らせませす。

「それから何うした」

と穏やかに平次。

「俺は捨鉢<sup>すてばち</sup>になった。が、母が生きているうちは、命を捨てて多賀屋へ斬込むわけにも行かない。お福が江戸一番の蓮葉娘で、大勢の馬鹿な男に騒がれて居るのを幸<sup>さい</sup>い、親分に頼んで身代り聳<sup>したて</sup>を仕立て貰い、俺はそつとここへ来て、お福を殺す工夫をした。大身代を継<sup>つ</sup>ぐ花聳<sup>はなむね</sup>が、金沢町小町と言われた嫁を、婚礼

の晩に殺す筈はないと世間では思うだろう」

錦太郎の言葉は次第にか細い述懐じゅつかいになつて、ともすれば途切れます。

「それから？」

平次はもういちど静かに促うながしました。

「お福さえ居なきや、俺は勝手だ。親父おやじの遺言状ゆいごんじょうが出ても、三千両しんしやうの身上を受

取るだけで、何の怖いこともない」

「——」

「細工が過ぎて親分に見現くわされた、——口惜くしいが仕方がない。サア、縛くつてくれ、磔はりつけ刑にでも火焙ひあぶりにでもしてくれ、——その代り、万一俺の母親うが餓う死じするような事があつたら、俺は死んだつてお前たちを安穩あんのんにはおかないぞ」

紋附姿の錦太郎が、身を顫ふるわせ、畳を叩たたいてこう言うのです。

「嘘うそだ嘘うそだ」

抗弁もしどろもどろに、多賀屋勘兵衛は立ったり坐ったりしております。

誰ももう、口を利く者ありません。

平次は一座の空気を、慎重あじわに味い尽しました。善悪ぜんあくじゃせい邪正が、鏡に映るように

判って行くような気がします。

「八」

「へエ——」

突如、平次に呼ばれてガラツ八は入って来ました。

「この家は出口出口を塞ふさいでいるだろうな」

「へエ——、下っ引が五六十人、十重とえはたえ二十重に困んでいますよ」

「よしよし」

八五郎の応えの常識おおげさ以上に大袈裟おおげさなのを、平次は笑いもせずにながずきましました。

「何をやらかすんで、親分」

「俺の指した野郎を縛れ」

「へエ——」

「それ」

平次の指は、ピタリと、仲人宝屋なこうど祐左衛門ゆうの胸を指したのです。

「御用ッ」

「わッ、御勘弁。私は、私は何にも知りません」

あわてた宝屋、畳の上を額おほで泳およぐような恰好になるのを、ガラツ八は襟髪を取ってピタリと引据ひきすえました。

「野郎ッ、神妙にせいッ」

「申します、申します。皆んな申上げてしまします。——多賀屋さんには数々のお世話になってるので、断り切れなかつたのでございます。——仲屋さん

の先代の遺言状は、すぐこの場で錦太郎さんにお渡し申します。——御勘弁を。

お願い」

宝屋祐左衛門は、懐中から紙入を取出して、ガラツ八の腕力の下に、何やらモゾモゾ続けております。

「多賀屋さん、この祝言は取止めにしても異存はあるまいな」

平次は勘兵衛の方へピタリと向きました。

「それはもう、親分さん。娘の命を狙う者を養子になどは——」

勘兵衛はブルブルと頭を振りました。

「よしよし。それでは、仲屋の先代の遺言通り、三千両に利息をつけて、この錦太郎に返してやっちゃどうだ。——いやならお白洲へ持出すが」

「それは親分、殺生ですよ。三千両に十年間の利息をつけて出しちゃ、多賀屋が潰れてしまいます」

勘兵衛は泣き出しそうです。

「貧乏になるのも洒落しやれているぜ。世帯の苦勞をさせると、第一娘がもう少しり口になるよ、貧乏の味のよさを知らないのが金持の落度なんだ」

「親分、それは可哀想じゃございませんか」

「まだまだ可哀想な人間は、広い世界にうんとあるぜ」

平次はなかなか譲ゆずりそうもありません。

「親分」

錦太郎は顔をあげました。

「何だい」

「お礼の申し上げようもございません。——親分のお心持はよく解りました。そうとも知らずに、御手数を掛けた上、散々悪口を言つて——」

錦太郎はボロボロと涙をこぼしながら、畳の上へもろて双手を突くのです。



「気が立つと、余計な事も言うものだ。そんな事は心配しなくて宜い」と平次。

「親分、——私もこの上欲張よくばったことは申しません。あの化け娘と一緒にならずに三千両返して貰えば、それで沢山です、——利息なんか、一文も要りませ  
ん」

「それは本気か、錦太郎」

平次は眉まゆを開きました。錦太郎の言葉が、この空気の中では、かなり予想外だったのです。

「本当ですとも、親分。六十になる母親の老先おいさきを幸せにするだけなら、三千両でも多過ぎるくらいで、あとは私が精せいいっぱい働きます。何んなら——」

「よしよし、それ以上負けさしちや、多賀屋も冥利みょうりが悪かろう。お前は思ったより良い男だ、手の混こんだ人殺しなんかするより、心を入れ替えて商売はげでも励

むがよかろう。下女のお常の引つ掻き<sup>か</sup>くらしいは、俺が何とかしてやろう。なア、多賀屋

「へエ」

「三千両の利息で、膏藥<sup>こうやく</sup>がどれくらい買えると思う」

平次はそんな無駄を言いながら、もう帰る支度をしておりました。

×

×

「溜飲<sup>りゆういん</sup>が下がったぜ、親分」

暁方近い街、女房のお静が待っている家路を急ぎながら、平次は応<sup>こた</sup>えました。

「気の毒なのはお福さ、心柄とは言いながら、あれじゃ江戸中に貫い手もある  
まい」

「あ、っ、しは親分」

八五郎はニヤリニヤリとほろ苦い笑いを見せます。

「お前も気の毒だよ、たまたま祝言をする事になると思うと、それが身代りだったりして、——でもあんな蓮葉娘はすっぱむすめと祝言しなくて飛んだ仕合せよ。そのうちに、煮豆屋にまめやのお勘ツ子にでも当って見ねえ、あの娘の方が余っ程筋が宜いぜ」

「チエツ」

八五郎は大きな舌打を一つしましたが、腹の中では怒ってるわけではありません。親分平次の今晚の裁きさばの鮮やかさあざに、すっかり陶醉していたのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「錢形平次捕物百話」第九卷 中央公論社 昭和十四年八月五日発行

底本—「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

ガラッ八祝言



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>